

ドイツの映画保存③

ドイツ・キネマテーク=ベルリン映画博物館

入江 良郎

Yoshiro Irie

連載:

フィルム・アーカイブ
の諸問題
第40回

(承前)

「フィルムハウス」の誕生と最新の映画博物館

2000年9月、ドイツでは4つ目の映画博物館(映画資料の常設展示)がベルリンにオープンした。母体となったドイツ・キネマテーク財団(Stiftung Deutsche Kinemathek以下ドイツ・キネマテーク)、はベルリン州が出資する財団であるが¹、ドイツの映画保存運動の中心を担

[表1]

スチル写真:200万点以上
シナリオ:30,000点
ポスター:20,000点
印刷物(プログラム等):60,000点
衣裳・セット・デザイン:15,000点
図書:60,000~70,000アイテム

[表2]

4階: イメージ
パイオニアとディーヴァ(1895-1918)
カリガリ博士(1919/20)
ワイマール共和国(1918-1933)
メトロポリス(1926/27)

3階: メトロポリス
大西洋横断(1918-1933)
マレーネ・ディートリッヒ(1901-1992)
オリンピア(1936-1938)
国家社会主義(1933-1945)
亡命(1933-1945)
戦後から現代まで(1945-2000)
人工世界

う主力アーカイヴとして国際的にも高い認知を得ている(FIAFへの参加は1965年。現資格はフルメンバー)。メイン・スタッフは42名。単純な比較こそできないものの、約15,000タイトルのフィルム・コレクションが日本のフィルムセンターのそれに匹敵する数量であると言えば、およそその規模が想像されよう。ポツダム広場の再開発により誕生した新名所ソニー・センターの一角を占める「フィルムハウス」は、ベルリン映画博物館(Filmmuseum Berlin)の他に図書室(6階)、大小2つの上映スペース(地下1階)、映画学校(9~10階)をも含む総合映画文化施設であるが²、学校(ベルリン・ドイツ映画テレビ・アカデミー[Deutsche Film- und Fernsehakademie Berlin/dffb])はもとより、上映施設(「アルゼナル[Arsenal 1+2]」)もドイツ・キネマテークとは別の独立した組織であることは外目には判りづらい。

ドイツでは全国的にコミュニティ映画館と呼ばれる非営利上映組織が発達していることは前に述べたが、1971年にオープンしたアルゼナルはそれらの先駆をなした伝統ある映画館の一つであり、これを運営しているドイツ・キネマテーク友の会(Freunde der Deutschen Kinemathek、1963年に発足)は、新人映画監督の登竜門として有名なベルリン映画祭のヤング・フォーラム部門を運営していることでも知られている。もちろん、アルゼナルはドイツ・

キネマテークが所蔵するコレクションを公開するための「会場」(またはプログラミング部門)ではなく、友の会は独自に15名のメインスタッフを抱え、しかもキネマテークとは別に6,000本ものフィルムを所蔵していることに驚かされてしまう。実のところ、ボンやハンプルクのコミュニティ映画館のように、地域の上映組織が千本単位のフィルム・コレクションを持つケースもこの国では珍しくない。それでもアーカイヴとコミュニティ映画館、二種の機関の業務の重心は自ずと異なり、相方向的に膨張する傾向をほらみつてもそれぞれの社会的使命がより深いところで特化されているという印象が強い³。

一方のdffbは1966年に創立した、やはり先駆的な映画学校で、ダニエル・シュミットやヴォルフガング・ペーターゼンを輩出している。1970年から88年にかけてハインツ・ラートザックがキネマテークと映画学校のディレクターを兼務していた経緯もあり相互に親密な関係を作り上げてきた。これら地元の主な映画事業を一箇所に集め、文化政策の拠点としてリニューアルさせたベルリンの意欲は並々ならぬものがあるが、一方、フィルムや資料の貸し出し、閲覧などをサービスの中心としてきたキネマテークにとって、一般の来館者を対象とする公開事業への進出は初めてのことである。もう一つの目玉となっている図書室も、実は今回のフィルムハウスのオープンにあわせ、dffbの図書室を



ベルリン内の映画文化施設を集めたフィルムハウスの外観

そっくりキネマテークに移管して機能拡大したものである。

映画資料の展示：ベルリンの場合

ドイツ・キネマテークの創立は1963年。初代ディレクターは「少年探偵団」(1931年)などで我が国でも馴染みのある映画監督、ゲルハルト・ランブレヒトで、そのフィルムや映画資料のコレクションが活動の基盤となった。主な映画関係資料の所蔵数は表1の通りであるが、このほかにも380以上のエステイト(生涯資料)、多量の映画機材が所蔵されており、博物館の設置以前より、国内で最も充実したコレクションを保有する機関であったことは間違いない。

満を持してオープンした常設展(総面積は1,500m²)は、ドイツ映画の歴史をクロノロジカルに扱ったものであるが(表2)、そこには、先行する他の地域の映画博物館との棲み分けをはかることにとどまらず、あくまで決定打を放とうとする「老舗」のプライドを垣間見ることができる。

もちろん、これまで取り上げてきた他の映画博物館でもさまざまに「映画史」が語られてい

るわけだが、いかなる展示コンセプトも、実際には出品可能なアイテムが現存しているかどうか(所蔵されているかどうか)に左右される部分が多く、いずれの館も所蔵品の持ち味を生かしながら無理の無い文脈を付与するケースが多いように思われる。その点、「カリガリ博士」や「メトロポリス」、マレーネ・ディートリヒやレニ・リーフェンシュタールと、世界映画史にも大書きされる自国映画の通史(メインストリーム)を語るというコンセプトは一見単純であるかに見えて、アーカイヴの実力を如実に表わしてしまうものであり、100年間の歴史に見合ったコレクションの量とバランスが要求されることはもちろん、とくにベルリン映画博物館の場合は、そのプレゼンテーションが自然な出来映えである(苦労の痕跡が見えない)分だけ、慎重に時間と労力、予算をかけて練り上げられたことが判る(会場の出口にはその制作にたずさわった90人近くの名前がクレジットされているのも圧巻である)。

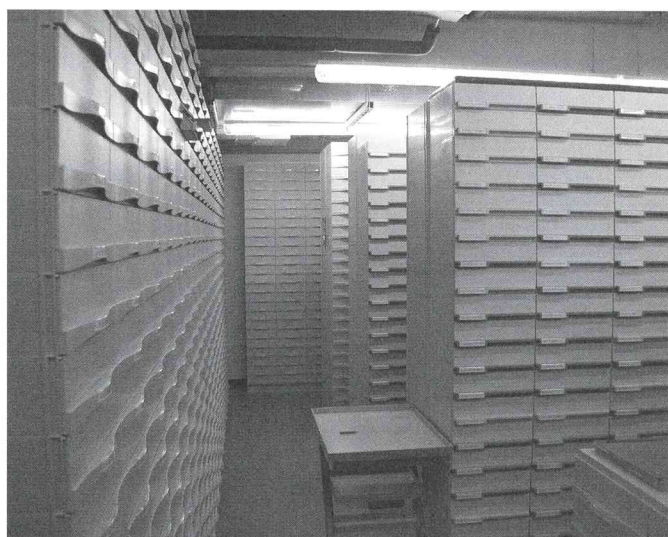
ハンス・ディーター・シャルが手がけた会場の造形も凝りに凝ったものであるが、歴史的

な映画のフッテージをいくつものモニターに映し出す「イメージ」のコーナーをはじめ、会場内に84ものビデオ・セットを設置している点も特徴的である。このことは前回触れたF・W・ムルナウ財団とDEFA財団がそれぞれ戦前ドイツ映画と旧東ドイツDEFA作品の著作権を一括管理しているドイツ独特の条件に負うところも多いと察せられるが、このほかにも映画発明者の一人マックス・スクラダノフスキーや、アスタ・ニールセン、ヘニー・ポルテン、フェルン・アンドラといったスターなど展示に関わる映像・情報を収めたマルチメディア・ステーション、コーナーの各ポイントで展示物に関する情報を引き出すことができるオーディオ・ガイド・システムなど、近代的な設備を意欲的に導入している点でも旧来の「映画博物館」のイメージを一新している。レシーバーは独語と英語のいずれかを選ぶことが可能。尚、ガイド・ツアーは独語による定期開催(日曜日に2回)のほか、英、仏、伊語版の申し込みも受け付けており、観光客誘致の対策も徹底している。

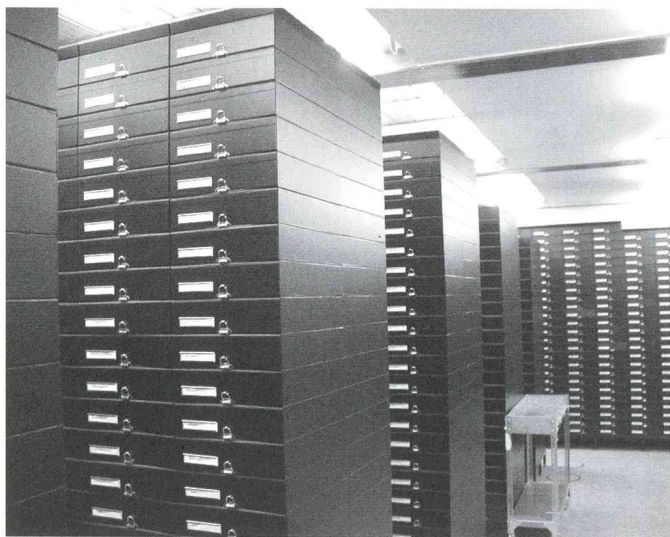
かくのごとき体裁に加え、社会的アピールに



diffbから移管された図書室



真新しい映画資料の保存室(写真)



映画資料の保存室(印刷物)



映画資料の保存室(生涯資料)

Berlin – Hollywood – Germany



Isaacs
In the major studios,
Isaacs with his 99 guns.
A journey through time takes us back
to the early years of cinema



Pioneers and Divers
(1895 – 1918)
National pioneers give life to
the images.
The first films, the first books,
the first stars

Colours (1918/1920)
Exp. experiments in a horror film.
Star in Berlin: Heinrich

Metropolis (1926/27)
Science fiction: 'Metropolis' in the
great Berlin period. The great House
of the Future: Metropolis

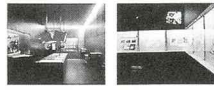
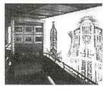
Technofest (1918 – 1932)
Isaacs and Metropolis: a journey
to Hollywood. The first films open
to film technology in 1932



Film in the Weimar Republic
(1918 – 1933)
The period of the Weimar Republic
about films and early films.
Isaacs, Mary Pickford and other
great stars of film, even the world's
most famous

Metropolis (1926 – 1927)
Early in Berlin and Germany a real
star: Mary Pickford, even the world's
most famous

The Olympics (1936 – 1938)
Games in the period of National
Socialism: the first films, the first
stars, even the world's most famous



Film in National Socialism
(1933 – 1945)
Happened to cinema, cinema
to cinema.
Under the stars and stars out
of the film: the picture of
the people in Joseph Goebbels



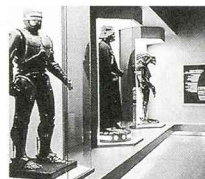
From Film War to the Present
(1945 – 2000)
How the film changed in divided
Germany.
A look at the most successful films
in East and West



Artificial Worlds



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Close encounters
Between film and
the imagination.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination



Key Harryhausen
A look at the making of the
stop motion artist.
Harryhausen and
the magical world of
the imagination

[表3]

ディレクター:1名	
[フィルム] 主任:1名	
技術:4名	
ディストリビューション:2名	
秘書:1名	
[関係資料] 主任:1名	
写真2名	
生涯資料:1名	
印刷物:2名	
機材:1名	
データリッヒ・コレクション:2名	
[展示] ディレクターが兼任する主任 と他の2名	
[出版] 主任:1名	
編集:2名	
[博物館] 会場管理:2名	
パブリック・リレーション(ガイ ドツアーなどを組織):2名	
[ミュージアム・ショップ] 2名	
[図書室] 主任:1名	
司書:5名	
[事務管理] 主任:1名	
事務:4名	
秘書:2名	

[表4]

図書:図書室の開室は火～金曜日。書庫は開架式で、図書の貸し出しも行なっているが、閲覧の対象者は16歳以上で、1年間60マルク≒3,394円(学生は半額の30マルク≒1,697円)の会費が必要(それぞれの半額で半年間の資格、2マルク≒113円で1日の資格もある)。

シナリオ:予約による館内閲覧は無料。貸し出しおよび全文のコピーは不可。ただし利用者の負担で作成したマイクロフィルムを貸し出すシステムがある。

写真:利用料は1945年以前の素材が100マルク≒5,657円。1945年以後の素材は75マルク≒4,243円。素材は貸し出しのみ(使用後は要返却)で、ほかに複製の実費が必要。

生涯資料と寄託資料:館内閲覧は無料。ポスター、衣裳・セット・デザイン:100マルク≒5,657円でポジを提供。

印刷物:館内閲覧は無料。複写はA4サイズ(ドイツ工業規格)で0.50マルク≒28円。出版目的の複写の場合は追加料金がかかる。

ベルリン映画博物館パンフレット

より完全を期すべくいくつかの大胆な「投資」が行なわれている点は、さらに注目される。一つはレイ・ハリー・ハウゼンによるストップ・モーション・モデルやSF映画のミニチュア、着ぐるみを陳列した「人工世界」のコーナーで、この分野では有名なロルフ・ギーゼン・コレクションが招かれた。このコーナーのみが外部のコレクションによる構成で、全体のコンセプトとも異なる文脈を作り上げているが、バーベルスベルクやミュンヘンのほか世界各地で人気を集めてきた同コレクションがベルリンに根拠を構えたことになる。

そしてもう一つ、ベルリン映画博物館最大の呼び物として設けられたのが、マレーネ・ディートリッヒの大コーナーである。ドイツが生んだ最大の映画スターにして、1939年にアメリカで市民権を獲得したディートリッヒは、1992年にパリで没した後ようやく生まれ故郷であるベルリンの墓地に埋葬されたものの、その後も複雑な国民感情に取り巻かれていた経緯があり、ディートリッヒ展示室のオープンには、その市民権の回復を示す出来事として我が国でも大きく報じられたところである。ベルリン州が1993年に獲得したコレクションは、ディートリッヒの死後、欧米各地に散らばる遺品をサザビー(ニューヨーク)がまとめたもの。3,000点もの装身具、16,500点の写真類、2,500点の音声資料、350点のポスター類、300,000ページにおよぶペーパー類が含まれており、ベルリンとハリウッドの相互関係、または亡命映画人の歴史を得

意分野とするドイツ・キネマテークのコレクションに、最も広く社会的関心に訴えるアイテムを加えることになった⁴。

洗練されたコレクションの保存と公開

コレクションの管理は、フィルム(ユーザー・プリント)と主なペーパー・コレクションをソニー・センター内で、その他のコレクション(ポスターや衣裳、映画機材など)についてはシュパングハウにある保存庫で行なっている(ただし後者は訪問時には改築中のため未見)。

ソニー・センター内の保存室ではフィルムに対して20℃、65% RH、ペーパー・コレクションに対して18～20℃、50～55%RHの温湿度が採られている。コレクションの整理は素材別に分業化が進んでおり、データベースの構築も他のアーカイヴの一步先を行っている様子。データベースのコンピュータ化は、ドイツでも各アーカイヴで開発が進められてところだが、例えばデュッセルドルフ映画博物館や連邦資料館のようにカード式カタログを併用しているアーカイヴもあり、また素材別のデータベースをリレーショナルなシステムに統合していたのはベルリンだけであった。ところで、欧米のフィルム・アーカイヴでは、日本と比べ多かれ少なかれ業務の分業化が進んでいるのが普通であるが、今回はその好例としてドイツ・キネマテークのスタッフ42名(メイン・スタッフ)の配分を示しておきたい(表3)。

その効果は、外部からのアクセスへの対応

好評発売中!

*大ホール受付(2階)にてお問い合わせください。郵送ご希望の方は、フィルムセンター ☎03(3561)0823までお問い合わせください。

NEW! 東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵目録
日本劇映画 2000

フィルムセンターが所蔵する日本劇映画4,325本(3,153作品)のカタログ情報網を網羅した映画研究者必携のカタログ。タイトル、主要スタッフ・キャスト、製作会社、封切年月日、色彩・音響の有無、画面比率といった基本データに加えて、所蔵フィルムの形状、世代、フィート数をはじめとするNFCならではのアーカイヴ・データも採録しているのが特長。1986年以降の改訂版で、多くの新収蔵作品を掲載(A4判、468頁、定価2,800円)。



新築なったアルゼナル(2点とも)

面にも如実に反映されている。アクセス・ルールはWEBサイトにも独英2言語による比較的詳細な記載があるが、その概略は以下の通りである(表4。ただし現地で得られた情報も一部補い、必要な場合は訂正も加えた)。

尚、いずれの場合も著作権処理は原則として利用者側の負担。マレーネ・ディートリッヒ・コレクションについては上記よりも高額の料金体系が用意されているが、全般的に言って情報がよく開示されている上、以前に紹介したドイツ映画博物館や今後紹介する連邦資料館などと比べてもリーズナブルな料金設定である分、「オープン」なイメージが持てる。このように保存事業と公開事業のバランスがよくとれたケースは、やはり多面的な事業展開を行なう傾向を持つ我が国のフィルム・アーカイヴにとっても参考になる部分が多い。

同様にフィルムのディストリビューションもよく整備されており、アルゼナルとの棲み分けからも想像できる通り、ここでもフィルムの保護に最高のプライオリティが与えられていることは言うまでもないが、15,000タイトルの全コレクションのうち、2,100タイトル以上に対してユーザー・プリントが確保され、そのうち400タイトルに対して著作権がクリアされているという。ちなみに利用料はビデオまたはフィルムの館内閲覧が1時間毎に30マルク≒1,697円、クリッピングの使用は1メートルあたり4マルク≒226円/最初の1時間に対し35マルク≒1,980円、貸し出しは35mmプリントが70~300マルク≒3,960~16,971円/16mmが70~160マルク≒3,960~9,051円/短篇(100m以内)は30~100マルク≒1,697~5,657円である。ユーザー・マテ



リアルの構築は、次世代へ向けた保存を社会への還元に結び付けけるもう一つの要であることが判る。

常にドイツのフィルム・アーカイヴィングをリードし、そしてまたベルリン映画博物館という新しい装いのもとに順調なスタートを切ったドイツ・キネマテーク。その根幹をなすフィルムの保存では、1998年より可燃性素材を含むオリジナル・ストックを連邦資料館フィルムアルヒーフの保存施設(コブレンツ及びヴィルヘルムスハーゲン)内へ移設し、アーカイヴ間の新たな協力体制の構築へも踏み出したばかりである。ここにもダイナミックに変動を続けるドイツ映画保存の姿がある。(次号に続く)

註

- 1 1967年までは予算の100%が州によってまかなわれていたが、現在は75%を州、残りを連邦政府が分担している。組織名称は外部に対し「ベルリン映画博物館」を用いることが多くなっているが、今のところ旧来の「ドイツ・キネマテーク財団」も正式名称として存続している。
- 2 このほかに所蔵品データやCD-ROMなどの外部データベースにもアクセスできるオンライン・センターも開室予定。1階にはミュージアム・ショップ「M」ショップ(以上は映画博物館の運営)、ビストロ「ビリー・ワイルダース」も併設されている。
- 3 尚、アルゼナルでは、月1回程度の割合でドイツ・キネマテークのコレクションが上映されるほか、ときに二者合同によるプログラムも組まれる。
- 4 尚、特別展示は年4回程度の開催を予定。開館以来これまで、多くの映画人を撮影した写真家アンドレアス・ノイバウアーの作品展(ドイツ映画博物館が協力)、フリッツ・ラング展(第51回ベルリン映画祭のレトロスペクティヴ関連企画)、プロデューサー、ヨアヒム・フォン・ヴェーティンホフの写真作品などを集めたPhotos/Stories/Films、ドイツ映画のスターたちを顕彰したStarometerを開催している。ベルリン映画博物館の入場料金は特別展込みで12マルク≒679円(割引は8マルク≒453円、家族チケットは28マルク≒1,584円)。

* 人名・機関名等の片仮名表記、日本語訳については、足立ラベ加代氏(フンボルト大学日本文化研究センター)の協力を得た。

fiaf

東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ
<http://www.momart.go.jp/>

お問い合わせハローダイヤル
 ☎03-5777-8600

「NFCニューズレター」第42号
 (2002年4月-5月号/隔月刊)

発行・著作:

独立行政法人 国立美術館/東京国立近代美術館 ©

編集:

東京国立近代美術館フィルムセンター

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6

☎03(3561)0823

制作:

印象社

発行日:

2002年4月2日

* 無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER

Bimonthly

(Volume VIII No.1 April-May 2002)

Published and Copyrighted by
 The National Museum of Modern Art, Tokyo ©
 (Independent Administrative Institution National Museum of Art)

Edited by
 National Film Center

(The National Museum of Modern Art, Tokyo)
 Add.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan
 Tel.: 03(3561)0823

Designed and Produced by
 Insho-sha

Date of Publication:
 April 2, 2002

* No part of this publication may be reproduced or reprinted without the approval of the publisher.

「シネマ・カフェ」好評営業中!

昨年11月14日の開店以来、レストラン「クイーン・アリス」が運営するフィルムセンター1階の「シネマ・カフェ」は多くのご来館の皆さまにご利用いただいております。フィルムセンターの顔として、引き続き皆さまのご利用をお待ちしております。

